

マレーシア，バトウパハットのサゴヤシ調査の思いで

渡辺弘之

マレーシアにはNegri Sembilan州Kuala Pilah近くのPasohでのIBP(国際生物学事業計画)で、1972年1月と1974年1～3月に滞在したことがあったので、サゴヤシ (*Metroxylon sago*) 自体は水田近くや湿地に立っているのをみていたし、デザート原料としてのサゴパールのことは知っていたが、サゴヤシ・プランテーション、でんぷんを採っている現場はそれまで見たことはなかった。1981年12月のこと、2か月のタイ東北部での焼畑の調査を終えて帰国すると、京都大学東南アジア研究センターの高谷好一教授から、京都大学農学部サゴヤシ研究会の学生遅沢克也、梅本信也、矢野浩之さんたちといっしょにマレーシアに行ってくれないかといわれた。出発予定は1982年2月1日、期間は1ヵ月だという。

遅沢さんたちサゴヤシ研究会メンバーは当時まだ学部学生で、いずれも現地をみてはいないが、サゴヤシについての勉強はしており、その意気に対しサゴヤシ研究奨励基金から調査費がでたようだ。ともかく準備の時間がたりなかった。それでも出かけるまでに基金の長戸公さん、神戸大学名誉教授の佐藤孝先生に会い、サゴヤシについてにわか勉強をした。Tan, K.(ed.) *Sago, 76 (Papers of the first international Sago Symposium)(1977)*やStanton, W. R.& M. Flach (eds.) *Sago. The equatorial swamp as a natural resource (Martinus Nijhoff Pub.) (1980)*などで。サゴヤシでんぷんの生産地の一つはマレー半島、ジョホール州のバトウパハット (Batu Pahat) だとわかった。調査にはサゴヤシ研究会メンバー3人と、京都大学大学院農学研究科修士課程の沖森泰行、吉村守、東京農工大学学生大河内さん、それに当時近畿大学農学部助教授だった奥村俊勝さんの8名でかけた。

KL到着後、日本大使館、FRIM (森林研究所)、マラヤ大学、農業大学、MARDI(Malaysian Agricultural Research and Development Institute)などを訪問、サゴヤシに関する情報を集めてまわった。当時、サゴヤシ研究の第一人者で、Sago (Martinus Nijhoff Pub.) の編者でもあったマラヤ大学のW. R. Stanton教授に会いたいとコンタクトしたところ、幸いにもホテルマラヤのロビーで話を聞く機会が得られた。これでサゴヤシ・プランテーションにたどり着けると自信をもった。

Batu Pahat農業事務所 (Pejabat Pertanian) でのコンタクト先など情報を得て、2月10日、マラッカ経由で目的地Batu Pahat着いた。農業事務所のOsman bin Kolopさんが直接サゴヤシ・プランテーションを案内してくれた。場所はSg. Simpang Kanan沿いだったのだろう。サゴヤシを伐採、玉切りしているところ、プランテーションの中の細い運河を太い丸太をつなぎボートで引っ張ってるところ、さらにはでんぷんを採取している加工場など一連の工程をみせてくれた。しかし、ここだけか、もっといいところがあるのかも知れないとの思いもあり、さらに南のYong Peng, Ayer Hitamなどへも足を延ばしてみた。

やはり、案内してくれたところがアプローチもいい。せっかく、実際のサゴヤシ・プランテーションをみているのだから、面積当たりの本数、大きさなどを調べてみよう、準備してきた巻き尺をとりだした。20 m x 20 mのプロットを4つの地域で8ヵ所選び、樹幹をもったヤシ、樹幹をもたず葉だけの若いヤシ、さらには樹幹周辺にでているSucker (Stolon)の本数を数え、位置図・樹冠投影図をつくった。

調査報告書はサゴヤシ基金に提出しておいたのだが、1983年3月の熱帯農業学会102回研究集

会で「低湿地林の開発とサゴヤシ」として話題提供した。樹幹をもつサゴヤシはhaあたり多いところで樹幹をもったもの150本、樹幹をもたない若いもの675本、Stolonが2,125本あった。樹幹をもった大きなサゴヤシの本数に対し、まだ樹幹をもたない若いサゴヤシの本数が少ないと感じた。1年間にどのくらい伐採・収穫できるのかわからなかったが、有効な土地利用を考えればもっと幹を持たない若いサゴヤシの本数がある、適正な密度管理が必要であろうと感じたことを述べた。遅沢（現在、愛媛大学農学部）、梅本（京都大学フィールド科学教育研究センター）、矢野（京都大学生存圏研究所）さんたちは大学院入学後、サゴヤシとは直接関係ない専門分野へ進まれた。

その後、つくばでのSago'85. The third international Sago Symposium, Tokyoで「A view on density management of sago palm in Batu Pahat, Malaysia」として発表する機会をいただいた。

サラワクにも大きなスワンプがあり、サゴヤシでんぶん生産をしているようだ、Kuchingの森林局、農業研究センター、サバのTuaranにある農業研究センター、Sandakanの森林研究センターなどへ行き、情報を集めることにした。思い出として、もう時効だろうから書いておこう。8人で出かけたものの、梅本、矢野、大河内さんはBatu Pahatでの調査のあと、KLから帰国したが、あとの5人はサラワク、サバの状況もみたいとKuchingへ飛んだ。ここで遅沢さん、Kota Kinabaluで沖森さん、Sandakanで吉村さんと別れ

た。放って帰ったということだ。ほとんどがはじめての海外旅行、一人旅をして遅くなって欲しいという気持ちもあった。ところがKuchingで別れた遅沢さんがいつまでたっても帰ってこない。

指導教授の高谷好一さんに、「どこへ行っているのかもわかりません、無責任で申し訳ありません、反省しています」と、わびたのだが、「そのうち帰ってくるでしょう」と落ち着いておられた。数ヶ月後に元気な姿をみて、放っておいてよかったのだと思ったのだが、こんなことが許される時代であったのか、私が若かったのかとの思いが今でもある。

私自身は林学出身でもあり、非木材林産物生産、アグロフォレストリーでの熱帯林の保全、山村社会の維持に興味をもち、これを専門とし、サゴヤシとの関係は薄れたのだが、サゴヤシ学会が創設されるなど、研究が地道に進んでいることを知りうれしく思っている。これまで108回の海外渡航をした。若い学生と飛び込んだマレーシアでのサゴヤシ調査は思いで深いその一つである。

渡辺弘之：低湿地の開発とサゴヤシ．熱帯農業
28(2), 134-140 (1984)

Watanabe, H.: A view on density management of sago palm in Batu Pahat, Malaysia. Sago'85. Proceedings of the Third International Sago Symposium. Tokyo. 71-74 (1986)

(現在：京都大学名誉教授)



写真1 ホテルマラヤでStanton教授と会う



写真2 サゴヤシの伐採



写真3 水路で運ばれるサゴ丸太